

## 日本クリスチャン・ペンクラブ(JCP) 関東

あかし集「百花繚乱」出版記念



## 文は信なり

2019年盛夏号「百花繚乱余話」特集

発行責任者  
三浦喜代子(代表)  
事務局  
〒131-0043 墨田  
区立花 4-6-13  
TEL&FAX  
03-3616-8621  
郵便振替  
00170-0-61838  
HP:<http://jcp.daa/>

【目次】P1 三浦喜代子 P2 駒田隆 西山純子 P3 奈良ノリ子 島本耀子 P4 三浦喜代子 長山知子  
P5 山本披露武 P6 島田裕子 志田雅美 P7 長谷川和子 P8 菊地洋子 佐藤晶子 P9 安東奈穂美  
P10 井上弘子 槇尚子 藤井千明 P11 篠田一志 P12 JCP 紹介

## 『あかし文章』と『自分史』 三浦喜代子

「自分史」という言葉が市民権を得たのはいつごろからだろうか。かつては、自叙伝、自伝と言われるものがあつたが、自分史とは立ち位置が違うように思う。

そもそも自伝とか自叙伝は専門分野でその名を知られているいわゆる有名人が著してきた。読む前から著者を知っており、その生涯に興味を抱いている人の人生史ではないか。

ところが自分史は、市井の人の生活史で、たいていは自費出版である。人生の節目や退職や古稀、喜寿などを記念して出版する方も多くおられる。闘病記もある。自分の葬儀用にと作る方もある。

特異な体験でもない限り若い方は書かないだろう。著者はそれなりに年齢を重ねた方である。その点は自叙伝、自伝と共通するだろう。

自分史は出版の動機や目的がはっきりしている。読んでいただきたいとの願いがある。本離れの時代に、こうした本がごく自然に出版できるようになった風潮は幸いだと思う。

日本クリスチャン・ペンクラブ(JCP)は一貫して「あかし文章」を書き、出版して来た。

「あかし文章」は自分史の一部である。「あかし」とは「証し」とも言い、ある事柄への証言である。「あかし文章」は故満江巖理事長以来のペンクラブの活動の真髄、旗印である。敢えて「証し文章」とはしない。JCPのこだわりであり自負かもしれない。「あかし」される主体はイエス・キリストである。そこに絞っている。

イエス・キリストを信じる者たちが、聖書を中心に、信仰生活、教会生活をしていく中で、日々体験するキリストの愛と恵みを多くの人々に伝えたい、その思いで綴ったのが「あかし文章」である。一途な願いを目的にした「自分史」である。だから、無名の者たちではあるが、勇気を出して書き、出版している。満江氏時代は毎年発行して来たし、その後も隔年を出してきた。その数は創立六五年余のあいだに、ゆうに五〇冊はこえるであろう。

このたびは大きな計画を立てた。過去の「あかし文章」は一篇が原稿用紙で一枚から三枚ほどで、いわば生活のワンシーンを切り取ったものであるが、今回は一挙に自分史をまとめることにした。ひとりひとりの生涯史である。ある人は九〇年に近い歳月がある。一人分で大冊にもなる。だがそういうわけにはいかない。そこで一人の分量を決めた。二〇枚前後とし、「ミニ自分史」と名づけた。ミニではあるが、よくみると広大な宇宙的自分史の観がある。

考えてみると『聖書』は神の「証し」であり、神ご自身の「あかし文章」であり、唯一無二の「神の自分史」と言えるのではないか。私たちは神さまのマネをしているにすぎない。

## 落穂拾い

駒田隆

『百花繚乱』を書き終えて、改めて、全体を読んだのですが、その底辺を眺めてみると、やはり、戦争体験から抜け出していないことが、よくわかりました。

わたしにとつては、旧制中学生の時に、焼夷弾攻撃を受けて燃えるわが家を後に、降ってくる焼夷弾の中を母と逃げた経験は、幾つになっても脳裏を離れません。そんな思いを、子どもや、孫に経験させたくはありません。

ましてや、黒焦げの死体や、そこまではない黄色な死体を幾つも見た状況はとも見せたくありません。もつとも今なら、核攻撃でそんな状況を見ることもないでしょう。

平和のありがたさ、戦争のない社会のありがたさを、敗戦後、神の恵みのもとでわたしは十分すぎるほど味わいました。もともと、キリスト者は戦争をしない、とは言いません。十字軍の時代にも、聖地奪回と称して多くの血がながれました。

しかし、自分のために、キリスト者のために、異教徒を殺してもよいという理屈はありません。彼らもまた、神さまの創られた存在です。どんな小さい命にも、神さまのお恵みがあふれているのです。

「平和を造る人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。」(マタイ五・九)

パウロも言っています。「神の国は飲み食いではなく、聖霊によって与えられる義と平和と喜びなのです」(『ローマの信徒への手紙』十四・十七)。

来年、卒寿を迎えるわたしにとつては、これまでの人生の落穂を拾いながら、それをいかに生かしていくか、考えていきたいと思っています。おそらく、わたしの気がつかなかった落穂がまだあちこちに残っていることでしょう。

暮るるまで 田ごとの落穂 ひろはばや

(諸九尼)

その落穂にはいっぱい平和の種がついているのではないのでしょうか。ほんの一束でも拾って、それでまた、「あかしの米」を作っていきたいのです。

「神の子」と言われるおいしいご飯を作りたいのです。みなさんにも食べてもらうために。

## 魅せられて

西山純子

もし、あの時に―それぞれの自分史―「百花繚乱」という課題を与えられていなかったら、私はあの時を越えられたかどうかと、大袈裟でなく思う。

あの時、私は既に夫の介護を機に腰を痛め、腰をかばって仕事をしている間に足を傷めてしまっ

ていた。辛うじて運営委員会には出席が適ったものの、皆の歩行速度にはもう付いて行けなかった。そのような中で、M姉が「次のペンクラブ発行の証集は自分史とし、少し変わった題『百花繚乱』などいかがでしょうか？」と言われた時、嘗てない華やかな明るい光がパーツと射すような、何とも表現しがたい嬉しいワクワク感をいただいた。

委員の中には、やや面食らった当惑気味の方もおられたかもしれないのだが、私は、

「良いと思います。咲き乱れる花々のイメージが、今までにない楽しい自分史を書いてみたい気持ちをいただいた気がします」と言葉が発していた。

介護の日々と自身の痛みのある脚腰に負けないエネルギーを貰える題と瞬間的に理解したのだ。私は熱くなって何やら力説したように記憶しているが、何を力説したかは定かではない。

その時の私には環境に負けまいとする意欲が、この「百花繚乱」に課せられたと言って好いだろうか。そんなに大層に言わないまでも、心のどこかが柔らかなっていたことには違いなかった。

さて、そんな嬉しい思いを抱いたからには、そのワクワク感を達成せずにはいるものかと、当時の私はかなりな勢いでこの自分史「百花繚乱」に気持を注いだ。

その一つは教会の皆に、この題名と三年後には本になる自分史に関心がないかと伝えることから始めた。毎週会える友の誰かと共に紡ぎたい願

からだだった。

M 姉の書いてくださった自分史覚書を貼り付けにして、前後に私の誘いの言葉を添えたものを作成しコピーした。牧師に承諾をいただき、参考になるペンクラブ発行の書物も添えて受付の机に置かせてくださったのも嬉しく感謝した。

こうした経緯によって、二人の友が書いてみようかと声をかけてくださった。

介護と脚腰痛の中で、「百花繚乱」は下向きになりかねない私の心を高く上げる方向に誘った。最終章で難儀してしまい、未だに釈然としないままにしているのは残念だが、ある見地からの自分史だ。親しい友も交えての一冊。先ず神に感謝の祈りを捧げたい。

### こぼれ話

#### 父の趣味・姓名判断

奈良ノリ子

父は小さい時から、私をかわいがってくれましたが、大人になっても、変わりませんでした。

私の青春時代、教会で知り合った青年と親しくなり、教会の帰りに私の家に立ち寄るようになりました。もちろん、父をはじめ母、姉にも彼を紹介しました。

父は川魚釣りの名人でしたので、鮎などを釣ってくると、母が台所でさばいて、彼を歓待してくれま

した。

彼は長野県出身で、どちらかといえば、魚はがて、父のさそいを聞くと、困ったのでしよう、黙って消えてしまったこともありました。ある時、父が真面目な顔をして、私の部屋に来るなり、「ノリ子は奈良君と将来、結婚するつもりなのか」と、聞いてきました。

「はい、そのつもりです」

父は、

「今、パパが研究している姓名判断によると、奈良君は短命と出ているんだよ」と、申しました。

「もう一度ゆっくり調べてみるけどね」

父は心配するし、私もその答えが出るまでは、ゆっくり眠れませんでした。

ところがその翌日、父が私のところに来て、

「ああ、パパが字画を間違えていたよ。奈良君で大丈夫」

と、ケロリとして申しました。

このことは誰にも話したことはありません。

さて、夫、昴は私より先に、天国に行ってしまった。

その事は、自分史にも詳しく書きました。彼の記念日の年齢は、七十七歳でしたから、やは

り父の言ったことは正しかったのだと、今更ながら、一人で笑ってしまいました。

神のなさることは素晴らしいと思いました。

神は私たちを会わせてくださったのです。

### 終着駅は始発駅だった

島本耀子

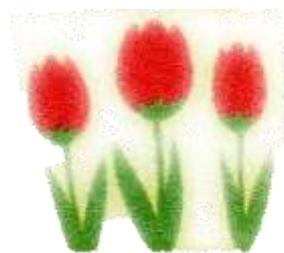
自分史めいたことは、ペンクラブ入会早々に書きましたが、時過ぎて再び、「百花繚乱」が提唱されました。辿った道はすでに書いたもので、再び同じ内容・表現はなるべく避けたいと思いました。

私たち夫婦は今春結婚六十周年を迎えました。昭和三十四年三月三十日。私の父母同道で宇和島の夫の実家で挙式の後、両親はそのまま九州旅行へ向かい、私も思いがけない親孝行ができました。

私たち新婚夫婦は、結婚祝いと共に、土産の海産物の大荷物を抱えて、新居の新宿のアパートへ帰りました。翌日から小分けした土産を持って夫の上役宅へご挨拶まわりです。忙しく過す間に、カレンダーは四月十日になっていました。

ある次長さん宅で勧められて、皇太子ご夫妻のご成婚パレードを見せて頂きました。私たちにはまだ高嶺の花のテレビでした。今年で平成の年号が終わり、令和となりました。私たちも同じように両陛下と新しい時代を歩いてきたのです。

六十年の間には様々ありましたが、私たちは協



力して乗り超えてきました。夫は私を「戦友」と言ってくれます。何があっても、「終わり良ければ総て良し」です。これにはどんな花が似合うかなど、作品を夫に見せました。意外にも夫の顔色が変わりました。仕事のための何気ない言葉の一つが、夫を傷つける禁句だったのです。

夫の両親が住む宇和島は、新幹線がない時代でしたから、東京駅から寝台車に揺られて、都内の出発から到着まで一昼夜掛かりました。予讃本線の終着駅は宇和島です。「終着駅・宇和島あー」と、古びた木造の駅舎一杯に、駅員の声が響きわたりました。初めて聞き今も耳に残る、哀愁を帯びた駅のアナウンスの印象を、「文化果つるところ」という当時観た映画に重ねている私でした。

人それぞれ、終着駅は始発駅であり、始発駅が終着駅であるのです。先日、「終着駅・宇和島」は、夫にとつては「出発駅」だったのだと、ふっと気が付きました。そして、面白がっていたのを少し反省して、夫に言う、「そうだよ」と一言。その目は、今更気が付いたかと、笑っています。

夫が生まれ育ったのは、宇和島からさらに入った僻地の漁村です。夫は村の中学から市内の県立高校、東京の大学へと進んだのは、親のお陰だと、今でも感謝を忘れません。ひと時でも親へのわだかまりを残していた私の作品を、心外にも「暗い」と評した訳にやっと気が付きました。

私の名は光偏です。古くは「かがよう」とも読

みます。父から貰った大切な名前に恥じない生き方を心がけてきたつもりです。

私に与えられた残り少ない時間は、「光の子」として生き、読後感のさわやかな作品を書くことだと、教えられました。

### 「百花繚乱」が用いられますように

長山知子

JCPに入会して二五年たちました。その間に育てていただき、こうして文章が書けるようになりました。今回「百花繚乱」にも加えていただき、何とか書き上げることができありがたく思っています。私は母教会のメンバーに配りたいと思っています。この作品集が豊かに用いられるようにお祈りしています。

### 支流のせせらぎから 三浦喜代子

二年をかけて書きあげた「自分史」は、人生大河の奔流を大筆でなぞったようなものでしょう。しかし川には必ず支流があり、さらにいく筋ものせせらぎがあるものです。小さな流れのほとりに座れば、キラキラ光る水面の下に、藻や魚たちや小石が手に取るように見えます。

十五歳の時に私を救ってくださった神様は、今八十路に向かう私のかたわらに添って、忘れかけていたせせらぎにも似た小さなシーンを映し出してくださいました。

大戦が終わった八月十五日の午後には、軍需工場の徴用工だった父たちは即刻解雇され、社宅も明け渡すように言い渡されました。もちろん私は覚えていないのですが、両親はじめ近隣の人たちはどんなに途方に暮れたでしょう。

ところが翌日、「潮干狩り行こう」とだれが声を発したのでしょうか。人びとはいつせいに船橋の浜に押し寄せました。すでに見渡すかぎり人の山でした。戦争中は爆撃を恐れてだれ一人海に近づけなかったそうです。大きなあさり、ハマグリなどがザクザクと採れました。大人も子どもも無我夢中でした。はてしなく青い大きな空と海原に、歓声が響き渡り、笑い声ははじけました。子どもながら私の心も大きく広がるの感じました。ようやく訪れた平和の喜びだったのでしよう。

二七歳の夏、初めてわが子を抱きました。第一子を死産で失ってから二年、生まれるまで不安が絶えませんでした。神様はついに私を母にしてくださいました。私はひと時も我が娘から目を離せませんでした。子どもってこんなにもいとしいものなのか、私のうちにこんなにも愛せる心があったのかと驚きました。

追いかけるように妹が与えられ、私は両手に抱

きかかえ、時に姉をおんぶし妹をだっこし、世界中に見せて歩きたいほど誇らしい気持ちになりました。神さまはかつての涙をぬぐいとって、イサクを抱くサラのように笑わせてくださったのです。

古稀を迎えたころ、新設の聖歌隊に誘われました。この年齢で、今さら歌ですか？ とためらいがありました。同い年の姉妹に励まされ、今では、私の生活の新鮮なプログラムになりました。

家でも猛練習。ときどき娘家族から苦笑されますが、バッバやヘンデルの曲を賛美できるなんて、人生の付録としては大きすぎる恵みです。

せせらぎに耳を澄ますと何か語っているようです。笑い声も混じっています。時に、歌っているようです。神さまの恵みを語り、愛と喜びを歌っているのでしょうか。

御国にも「水晶より透きとおる流れ」があるそうです。そのほとりで、最愛の主と兄弟姉妹に会い、多少は上達した賛美をささげられるでしょうか。

### 題名はすぐに決まったが

山本披露武

自分史を書くという事が決まった時、すぐに妻との出会いから別れの時までのこととを思った。

書くことはある。ありすぎるほどある。妻と暮らしたのは、五二年と十一日だ。その間にあったあ

事この事を拾っていけば、立派な自分史になる。題名は「また会う日まで」だ。

よし、これでいこう。書き出しは彼女との出会いからだ。そう思って、初めて会った時の事や手紙のやりとりをした事などを書こうとしたとたんに涙が出てきてどうにもならなくなってしまった。

それでも、これだけは書かなければいけない。そう思って、パソコンに向かうのだが、一行書いては涙、次の一行書いてはまた涙。その内に、涙で目がはれぼつたくなって、先に進めることができなくなってしまった。

先立たれてまだ一年も経っていないのだ。妻とのことを書くには少し早すぎたのかもしれない。そう思って、あきらめかけてはまた気を取り直して書くこととするのだが、やっぱり書けなくなってしまふのだ。そのような事があって、何回も中断しながら二か月ほどもかけてようやく第一章の「赤い糸」だけを書くことができた。

第二章の「義兄との出会い」は、妻に会う前のまだ学生だったころの事なので涙を流すこともなく、楽しみながら短時間で書くことができた。

第三章の「妻との出会い」は、またも涙ぐみ、ウルウルしながら書き進めた場面もあったが手紙のやりとりをしたことや、新婚旅行のための金策で走り回った時のことなどを思い出していく内に楽しくな



つてきて、第一章ほど苦労することはなかった。

また、第四章から八章までは家内がヘソクリ貯金をはじめたときのことや、私が病気で入院をしたときのこと、更に、定年退職後に家事の手伝いをしたり認知症の義父の介護で、てんやわんやの日があったりして、全く苦労をせずに書くことができた。

しかし第九章の「別れ」を書くときは辛かった。発病してわずか三日で旅立ち、せめて意識のある間に「ありがとう」の一言を言えなかつたことが残念に思えて、ペンが進まなくなってしまった。

そして続く最終章では、家内がメモ帳に残していた、「人は一人では生きていけない」という言葉に頭を抱え、何度も何度も考えさせられた。

それでもなんとか書き終えた時は、妻との約束を果たせたような気がして、ミニではあるが自分史を書いてほんとうに良かったと思った。

### 朗報

このたびのあかし集「百花繚乱」を通して、二名の方が会員に加わりました。大歓迎です！

★奈良ノリ子姉・千葉

★山角正子姉・千葉

### 編集レビュー

今回から、1丁に強い6丁に加わっていただき、「クラウド」を使って情報を交換し合い、編集作業ができるようになりました。大幅な前進です。感謝！ M

## 中学生の私に伝えたかったこと 島田裕子

中学二年の時、私は自分の存在価値がわからず、死を願うほどでした。『自分史』ではそのことが大きな位置を占めています。

自分がどういふ存在なのか教えてもらえたら、あれほど苦しむことはなかったのに……。そう思いながら、現在の自分が中学生の私に話したらどんな会話になるか想像して書いてみました。

「どうして泣いているの？」

「死にたい……。何をやってもダメなの。生きる資格がない」

「生きるのに資格なんかいらんわ」

「でも、みんな言うの。あの人、変わっているねって」

「みんなってだれ。家の人？ クラスの人？ 学校の人？ 日本中、世界中の人？」

「……」

「変わっているって言われたの？ 変わっていないのよ。それがあなたの個性だから」

「私には生きる価値がない……」

「そんなことないわ。あなたには大きな価値があり、あなたにしかできないことがあるの」

「私にしかできないことって？」

「今はわからなくても、将来必ず見つけられるわ」「どうして私に価値があるってわかるの？」

「それは、あなたを造った方が『非常によかつた』と言われたからよ」

「私を造った方？」

「神様はね、天と地とそこの中にあるすべてのものを造りになったの。そして、造ったものに『よし』と言われたの。神様は人間……。あなたのことと造って『よし』と言われ、『愛する子ども』とまで言ってくださったの」

「でも、私は愛される資格がない。罪があるから」「あなたの罪は赦されているわ。聖書には『わたしはあなたのそむきの罪を雲のように、あなたに罪をかすみのようにぬぐい去った』と書かれているの。」

神様は、あなたの罪を赦すために愛するひとり子イエスを十字架につけてくださったの。あなたの罪は赦されたのよ。もう泣かないで。あなたはひとりじゃないから」

自分の存在価値がわからなくて悩んでいる今の青少年にも伝えたいです。

『わたしの目にはあなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している』（イザヤ四三・4）

## 雪解け

## 志田雅美

自分史を書くこと決まった時、真っ先に夫の顔が浮かんだ。夫である以前に親友でもあった彼は、

自分史を書くのに欠かせない大きな存在だった。夫が亡くなって今年で一七年経つが、思い出し色褪せることなく心に焼きついている。ひとつひとつの情景を思い浮かべながらパソコンに向かうのは楽しい作業だった。

『すべてのわざには時がある』（コヘレト三・1）と聖書にあるが、ほんとうにその通りだ。

と言うのも、ペンクラブに入会したばかりの一年ほど前、童話・エッセイの会で「言えなかったアイラブユー」と題して夫とわたしのラブストーリーを書いたが、その時は楽しいとは思えなかった。題名にもあるように、言えずにのみこんだ言葉の数々を思い出し、自責の念に駆られてしまったのだ。と同時に、忘れたはずの胸の痛みもよみがえった。涙で筆が止まったことも数えきれなかった。

でも、今回は違った。自分を責めることも、胸が痛むこともなく夫を思い出すことができた。書く機会が与えられたことがうれしくてたまらなかった。きつと、神さまがもつともふさわしい時を備えてくださっていたのだろう。そうでなければ、喜びを感じながら書き続けることはできなかったと思う。

こうして、約一年の時を費やして自分史が生まれた。自分史というよりも恋愛小説のようになってしまったし、神さまはラストの二ページにしか登場しないが、信仰を与えられたおかげで今のわ

たしが在ると意識してしめくくった。仕上りの良し悪しはわからないが、夫と出会い、友情を育み、共に生きた証しを遺せて良かったと思う。

振り返ると、夫を失った悲しみに涙した日々さえ、今は大切な思い出である。雪が解け、やがて春が訪れるように、悲しみはずっとは続かないと神さまに教えられた。

心から感謝している。

『ひとりよりもふたりが良い。共に労苦すれば、その報いは良い。倒れば、ひとりがその友を助け起こす。倒れても起してくれる友のない人は不幸だ。更に、ふたりで寝れば暖かいが、ひとりはどうして暖まれようか。』

ひとりが攻められれば、ふたりでこれに対する。

三つよりの糸は切れにくい』

(コヘレト四・9〜12)

夫を思うといつも心に浮かぶみことばである。

夫はもういないが、わたしは独りではない。夫に生き写しの息子と、神の家族と、信仰の友がいる。そしてなにより、神さまが共にいてくださる。今、わたしは幸せをかみしめながら歩んでいる。

### 書くエネルギーはどこへ 長谷川和子

「印刷所に出したから」と代表のMさんから言葉、  
「えーっ」と絶句、書かない私が悪いのだが……。

「もちろん、まだ追いかけてられますから」とは言  
って下さったけれど。

「百花繚乱」の課題が決定した頃、夫が天に召された。十三年間の難病生活であった。

朝、意識がなくなり、救急車で病院へ。まさか死が近づいているとは思っていなかった。

一週間位、そろそろ退院できると思っていたのだが……。その日の夕方あつけなく 肺炎で亡くな

ったのである。熱も咳も出さず「苦しい」とも言わなかった。熱も咳も出さず「苦しい」とも言わな

かった。なぜ気付くことができなかったのか、思えばあの時、この時と危険信

号は出ていたのでは、それに気付くことができなかった。『ごめんなさい、ごめんなさい』と自分を責めた。

意識のない中でも手の握りは強く「この力はなん  
でしょう」と牧師に言わしめたほど。

どこから、この力が出るのか……と思うほどであった。「まだ死ねない。生きるのだ」という夫の思

いからではなかったのでは。長年、病いと戦いは本人にとつて辛いことばかりであつた。グチ一つ言わず前向きに、自

宅でもデイサービスでも機具を使つてのりハビリに励んでいた。

介護生活十年頃になると私は心身ともに、疲労していたのは事実である。

このような状況の中で突然旅立つた夫の気持ち  
を思うと、ペンを持つことができないでいた。

例会の度に原稿を持参せねばと思いつつも書けないのである。

合評のとき文章のない私が、他の人の原稿に対して感想を言うことの違和感にとまどいながらも、担当の立場を守らねばと精一杯の気持ちであった。童話は何篇か書いたが、書けないでいた二年間であった。

昨年の暮れに冒頭のMさんの言葉に尻をたたかれようとして、年末から一月八日まで必死で九六〇〇文字の原稿を書き上げ、Cさんがパソコンで打つて下さり、何とか滑り込みセーフの状態、皆さんの仲間に加えさせて頂いた次第である。

Mさんをハラハラさせてしまい、Cさんには私のためにお正月もなかったのでは、と申し訳ない気持ちでいっぱいである。

長いこと文筆活動をしてきた私だが、ペンを走らせることができない経験が味わい、人間というものには弱いものだなあと思うと同時に文章を書くということは、苦しみの中からも生み出すこともできるが、虚無感の中では書けないのではないだろうか。

ある程度の気持ちの余裕がないと駄目なんだという、経験をしたのであった。

さて出来上がった文章はどうなのか、以前、ペンクラブで出した「光に向かつて」と証しのために書いた「山に向かいて」を出版したなかに自分史を書いていたので、今回は夫との結婚生活を書くつもりでいた。ところが夫や子供のことは最後の一篇だけ、

まとめて書いただけである。

幼少期から二〇歳頃を中心に描いてしまった。「しまった」ということは私にとつて失敗なのである。何故かと思いつめぐらすと、父親が原因の家庭環境が強烈だったということに外ならない。すでに過去の出来事を全て、受け入れているはずなのにまだ払しょくできないでいるのだろうか。

今度書く機会があつたら、夫との結婚生活をじっくり書いたら、と思つている。もちろん子供や孫たちのことも……。

### 花ひらく時

菊地洋子

桜の枝の蕾はまだ固い。

秋には葉を落とし、黒ずんだ幹は見映えなく、行きかう人々の心を魅了することもない。ただ静かに時を待つ。沈黙している木々たちは静かにその時を待っている。刻まれる時と共に、蕾は赤みを増し、装いを変えるための準備を整える。今年もそんな季節がやって来た。

自分自身の人生が、今あの桜の木と同じ時期を迎えている様に思えた。

先日息子たちが、今年還暦を迎えた私の誕生日祝いを計画してくれた。近くの華屋与兵衛という和食のお店で、五人の息子、嫁さんに孫、母、私を入れ総勢十八名の祝会だった。他のお客様もび

つくりするほど豪華な、カサブランカやシンピジウム、赤やピンクのバラのたくさん入った大きなアレンジの花籠と、自分では購入することもないブランドのストール、三男のお嫁さんからは私だけでなく女性陣それぞれに、ネーム入り手作りアイシングクッキーがプレゼントされた。

神様は思いがけない方法で私の人生を導く。秘めていた深い傷をも癒される。「百花繚乱」を書くように導かれたのは主。ちょうど一年前の今頃、教会の敬愛する兄を車で家にお送りした時のこと。つくしの話から始まり、メールのやり取りをする中、JCPへのお誘いを受け、入会した。

私の六十年の歴史に光が当てられた。心の奥に突き刺さった棘を主は知っておられた。十字架の苦しみと痛みが私に迫り、圧倒的な主の愛が棘を焼き尽くした。深い傷は癒され私の中の怒りは嘘のように消えた。

人生の終盤に、こんなにも嬉しく有難い日を迎えられるとは、想像も付かなかつた。あの母あつて今の私がいる。あの人と結婚し、共に人生を歩んだからこの喜びがある。今はそう思える。

こうして五人の子供たちから多くの恵みを受け、独りでは経験し得ないこともたくさんさせて貰った。この人生を導かれたのは主。限りなく深い主の愛を知るために、ずっと私を背負って歩んでく

ださつたのだ。

息子各々から手紙を貰った。それは何よりも嬉しいものだった。彼らは、不完全な私のありのままの姿から、多くを学んでいた。春はもうそこに来ている。

全ての事に思いを巡らす時、ポジティブな考えに包まれる。

枝一杯に広がる満開の桜の花のように、多くの人々と喜びを分かち合うために、私を主が整え導かれるのだと。

### もう一つの絆・音楽

佐藤晶子

横浜に住んでいた頃、みなとみらいホールで開催されたパイプオルガンのコンサートを聴きに行った。アイワールス・カレイスというオルガニストで、ラトビアから来られた。それまでの私の音楽環境は、家でCDを聴くだけであつたので、この体験は私と音楽との関わりを大きく変えるきっかけになった。

それからはランチタイムに一時間位のミニ・コンサートがあるのを知り、散歩や買い物も兼ねて出かける楽しみができた。

娘が通っていた神奈川県立の高校で、PTAの成人委員会で保護者の交流も兼ねてコンサートとランチの会を企画した。できたばかりのミューザ

川崎のホールでパイプオルガンのクリスマス・コンサートをした。このホールは東日本大震災で被災し、しばらくの間コンサートが開かれなかったが、今はすてきなホールになって、市民の癒しの場所になっているようだ。

東日本大震災後に、ドイツ・リーベンゼラ宣教師の宣教師として来られていたシュトラウス先生のご家族が、今私が所属している千厩教会（岩手県）のプログラムにも積極的に関わってくださり、おかげでドイツの讃美歌に出会う機会がたくさんあった。

オカリナを月一回の伝道礼拝で演奏している私は、バッハの曲を練習する時間を得て喜びに包まれていた。教会は月に一回午後、フィリピンのクリスチャンのための礼拝にも会堂を開放していた。先生はそこでも流暢な英語でメッセージをされていたが合同のクリスマス礼拝を前に四年目の一二月初めに突然天に召されてしまった。まだ成人されていない三人のお子様方とご夫人が残された。私達はかける言葉が見つからず悲しみに暮れていた。今はドイツに戻られたが安定した生活ができるように祈り続けている。

音楽との繋がりは、私に、「あかし文章」とともに多くの生き生きとした信仰の出来事を与え続けている。どちらも主の恵みを伝えるために、また私自身の養いのために、励んでいきたいと思う。

### 一歩先の道は見える

安東奈穂美

#### 『年表は役に立つ』

自分史を書くことになった時は少し心配でした。いずれ本になる予定と聞き、私の人生を読みたい人がいるだろうか、と思ったのです。それでも、書き方の助言を得て、まずは自分の人生の年表を書いてみることにしました。大学ノートに年代、年齢、出来事、その時に感じたこと等を書き始めました。すると、やけに細かい場面を思い出すのです。いちばん古い記憶は、三歳頃、まだ肌寒い春の日に、くすんだ桃色のスカートをはいてみたら、板の間の下からひんやりした空気が足元に上ってくる場面でした。

幼稚園入園、小学校入学、と順を追って書いていきました。改めて、自分は人生の早い段階で神様に会ったのだな、とわかりました。些細なことでも不安になる性格なので、創造主の存在とイエス・キリストの愛を知らなければ、今の自分の生活はないでしょう。

#### 『筋トレは役に立つ』

元々、体力がない上に運動不足で五十代に入るとますます疲れやすくなりました。知人の紹介で、筋トレを推奨する女性専用のジムに通いはじめました。コーチは、会員が来た時から帰る時まで、笑顔を絶やさず、よく言葉をかけてくださいます。また、健康を向上させるための助言にも工夫が凝

らされ、定期的に体重その他の計測や筋力測定があります。現在の自分の状態を、数字で客観的に見て成果を確認するのです。時々、運動しながら、心の状態はどうだろう、と考えます。

#### 『人生には聖書』

心は目には見えません。ジムのように測ることはできないのです。しかし、自分史のために年表を作り、何を感じたか、自分への取材を重ねてみて、観察することはできると気づきました。そして、幼い頃から、心配性で不安を感じやすかった私は、最近よく聞く「生きづらさ」を抱えてきたこともわかりました。

試験と思われる道も通りましたが、それでもここまで生きてきました。人生を振り返りつつ、教会やキリスト教主義の高校で聖句を暗唱したことは大きな財産になっていると実感しました。世の中の価値観が変わっても、聖書の言葉は古びることも永遠に変わることもありません。人生で大切なことはすべて聖書に書いてあります。いつでも自由に読めるとは、何という恵みでしょうか。これからも、聖書が照らしてくれる天国に続く道を、一歩ずつ歩いていきます。

#### ◆編集だよ◆

文字作業のほがいつの間にか作品に夢中。これではいけないと再び画面に見入りますが、気が付くとやはり読んでいます。あかし文章の魅力は大なり！ S

俳句十句 井上弘子

黄みどりの 残る切干し 香りけり  
 防災の 物贈られし 敬老日  
 祭提灯 見え来て宿も あああたり  
 渋滞や 帰雁は列を 変へながら  
 若路の 伸び来て庭も 揺がりぬ  
 秋の蚊に 刺されし痒み いままでも  
 汗ばめる 幼子抱けば ずっしりと  
 陽も陰り アネモネ花を 閑じにけり  
 啄木の 歌を思えり 初御空  
 早やさつき 月日は我を 置きて去る

ヤイロの娘

榎 尚子

来年は東京でオリンピックが開かれると日本中が騒いでいる。

冬季オリンピックが札幌で行われたのは一九七二年の冬である。何しろ初めての冬季五輪でにぎやかだったに違いない。その二年前に結婚した私は次の年に初めての子供を授かり、毎日がわくわくするような日々を過ごしていた。

長女は夏の暑い日に大きく生まれ、半年を何の問題もなく成長していた。どこの新米ママも感じるようにただ元氣よく過ごしてくればそれだけで感謝で、当時の育児日記にはびっしり笑ったの

泣いたのが記されている。

年明けて一月たったころ、熱を出した。近くの開業医に行くと言われた。寒い日が続いていた時期なので、だれもが風邪だと思いついていた。当然ミルクを飲まなくなり、ぐずる時が多くなった。熱は全く下がらず、若い私のはどうしていいかわからず、医者への往診が頼りだった。さすが五日目になると医者の方も「おかしいですね。熱がこんなに続くのは。総合病院に行ってみますか」と言ってきた。

私たちはすぐに総合病院に行った。脱水状態です、すぐに入院してといわれた。そのまま病室に案内され、検査と点滴が始まり、初めて危険状態だと知った。それから一か月以上の長い入院生活が始まった。乳児のため完全付き添いとなった。訳が分からず入院した私たちはその後どんなふうに日を過ごしたのかよく覚えてない。そのころ、冬季オリンピックをやっていたようだった。病室にはテレビがあったが、見ていた記憶はない。新聞も読まなかった。世の中からは隔離されたような日々だった。時々家族が食事や着替えを持ってきてくれた。この子はどうなるのだろうと不安でたまらなかつた。

ある夜。聖書を読んでいると『世はふけ、日が近づいている』という言葉が出てきた。迫ってくるようだった。五キロの体重の赤ちゃんに七キロの点滴をするような日々の中で、初めてロマ書

のこの言葉に神ともいますという確信が与えられた。

そのころ属していた教会の橋本ナホ先生が「いのちを守られる主よ」と祈ってくださった。命を伸ばすのも縮めるのも主である、その主に信頼せよと励ましてくださった。

昔のことを長女は知らない。あなたが今いるのは神様がその時それがいいとお決めになったから。あなたは私同様にヤイロの娘だ。

次のステージへ

藤井千明

重い段ボール箱が届きました。ドキドキしながらガムテープを解いて中身を見ました。可愛い装丁のカラフルな模様が目に飛び込み、「あら、なんかお花の事典みたい、素敵、洒落てるね〜！」と歓喜の声で母を呼びました。「どれどれ？」と手にした母は、そのまま自分の部屋に籠り読みふけていました。そして私は、「誰にこの本をあげようかなあ？」と、心の中で呟きました。

実は、だいぶ前からこの本を渡す日をきめていたのです。今年の六月二三日、中学の同窓会「還暦を祝う会」に出席し、牧師夫人となっている唯一のクリスチャンや、久しぶりに会う同窓生たちの中で興味をしめしてくれる人がいたら、証言のためにもプレゼントしたいと思っていました。し

かし、私の思い描いていた計画は残念にもオジャ  
ンになりました。私の自分史のタイトル「還暦の  
目標」は儂く消えた・・・、という大げさでし  
ようか。

所属している救世軍での人事異動があり、その  
先では、既に決まっている行事が入っていたので  
す。なんとか夜中に日帰りしてでも参加したいと  
本気で考えました。今までに何度も同窓会の知ら  
せが実家に届いていましたが、この年になって初  
めて本気で参加しようとした同窓会です。そし  
て、母を連れて双葉町の一時帰宅もしたい、叔父  
や叔母、弟家族にも母を会わせたいと、頭の中  
は盛りだくさんの工程表を組んでいました。しか  
し、日を追うごとにその計画は叶わなくなり、遂  
に諦めて欠席の通知を入れました。

しかし、時間が経つてみると、どうしてそこが  
目標で、そして終わりのような感覚を持ったのだ  
ろうと、今ではむしろ新たな局面を見ることがで  
きるようになっていきます。諦めがいいというか、  
立ち直りが早いというか。実はゴールではなくス  
タート、前進なんだと気づいたのです。私の人生  
を主イエス・キリストがかり取りをしてくださっ  
ているのですから、この先、東に行くか西に行く  
かは、聖霊という風の吹くままに操られて進むだ  
けなんだと感じました。

今回の突然の予期しない人事異動もその一つと  
いうか、幕が開けて次のステージが始まったと感

じています。何よりも、次に進むために、私の六  
十年を整理する時間が用意されていたことには驚  
きです。

今回の異動では、福島から迎えた母も一緒に連  
れて行きます。錦糸町で二年、杉並では六年間を  
過ごしました。私たち夫婦が仕事に行っている日  
中や、長期の伝道キャンペーン、会議などで家を  
空ける時は留守番をしてもらいました。

母は自分のペースで、本を読んだり俳句を嗜ん  
だり、サスペンスをみたり、昼寝をしたり、私の  
代わりに買い物や家事もしてくれました。ま  
た大好きな草花は、ヤベツのように陣地を広げ近  
所の敷地にまで広がって咲いています。「百花繚乱」  
の表紙絵を見たときには、そのような花々が散り  
ばめられているように感じてとても気に入りました。

ところで、まだこの原稿を書いている間に、私  
の文章を読み終えたというメールが届きました。  
ペンクラブの会員の方から私の知人に手渡された  
ということですが、「誰にこの本をあげようかなあ？」  
などといつまでも考えている場合ではありません  
ね！

### 人生を映し出す鏡

篠田一志

自分史は人生を映し出す鏡だと思えます。

そのなかに神さまの摂理、人知を超えた神さま

のご計画、導きを見たとき、その不思議さには驚  
かされました。

たとえば、信仰の選択です。二十代、神仏との  
かわりを断ち、社会に羽ばたいた喜びはいまも  
忘れません。気づけばいまのわたしはイエスさま  
と出会い、救われた喜びを証ししています。

一方、離婚までも厭（いと）わず信仰に救いを  
求め続けた両親は、イエスさまに出会うこともな  
くこの地上を去っていきました。

キリスト・イエスを救い主として選択すること  
は、だれの人生においても大きな意味を持つと思  
うのですが、その選択はわたしたちにはではなく、  
神さまだけにあつたのです。

また、神さまは自分史のなかに愛と憐れみのみ  
わざを映し出してくださいました。そこから学ん  
だことが三つあります。

一つ、神さまは過ぎ去った事実を変えるのでは  
なく、その事実を見る心を変えてくださるのです。  
幼いわたしと母親との間に一つの「しこり」があ  
りました。忘れ去りたい事実であり、触れたくな  
い事実でした。しかし、自分史はその事実のなか  
に隠れていた母親の愛に気づかせたのです。

「しこり」はわたしと母との「愛の思い出」に  
変わりました。変わったのは事実ではなく、わた  
しの視点であり、心だったのです。

二つ目は、働いてくださったのは神さまであり、  
わたしではないことも知りました。

自分史を書き上げるとき、区切りの良いところで妻から意見をもらいました。あるとき妻から「両親に対しての憐れみを感じるよ」と言う言葉に驚いたのです。自分史は飾ることなく、素直な気持ち、思いを言葉にしてみました。妻はそのなかに神さまの愛と憐れみを読み取ったのです。

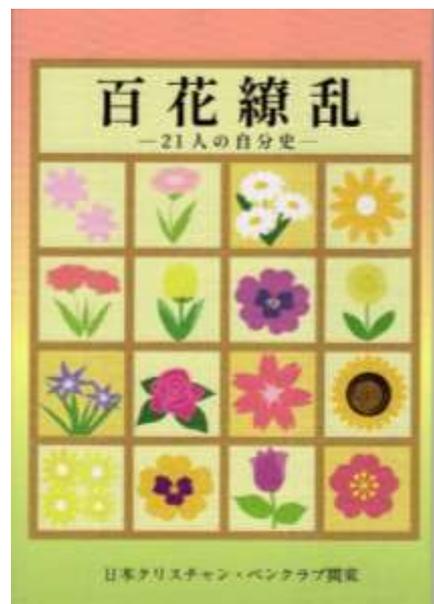
思わず、これはわたしではなく、わたしの内に働く神さまが紡(つむ)いでくださった言葉だと思いました。

三つ目は、いつもみことばに導かれていることです。作品が進まないとき必ずみことばに立ち返ります。みことばが与えられないときは、いくらがんばっても作品は進まないからです。

これら神さまのみわざに触れることは、ほんとうに不思議な経験であり、喜びでもありました。

でも、最大の収穫は、救われる前の人生に十字架の愛を見たことだと思います。はじめ、わたしは自分史を書くことに消極的でした。救われる前の人生を人前にさらすことに恐れがあったからです。しかし、筆はどんどん進み、わたしが恐れていた過去や忘れ去りたい出来事が作品として出来上がっていききました。愚かだと思っていた人生が神さまの御力を証(あか)しする人生に変えられていくのです。

まさに十字架の愛であり、赦(ゆる)しの愛だと思いました。



今回のあかし作品集『百花繚乱』は、二〇一〇年からスタートした並列四字熟語をタイトルに冠したシリーズの第五巻目です。過去に『花鳥風月』『喜怒哀楽』『春夏秋冬』『山川草木』の四冊が生み出されました。

『百花繚乱』には「21人の自分史」という副題がついています。執筆者たちは日ごろから「あかし文章」に取り組んでいる同志です。私たちは「神の庭園」に咲く百花の一輪「である」との理解のもとに、いただいた恵みを感謝と喜びをもって克明に書き綴りました。ここには、ある人は五〇年の、あるいは九〇年近くの歳月が凝縮されています。

この自分史は過去のお話してはなりません。今現在のホットな証しです。読んでくださる方の心に一筋のキリストの光をお届けできたらこれに勝る幸いはありません。

(本書のつづめじよばよ)

### 日本クリスチャン・ペンクラブ (JCP) の自己紹介

★起源は、1952年に発足した基督教文筆家協会にあり、村岡花子らプロの作家たちが立ち上げました。その後1963年に満江巖氏を中心に現在の名前に改名し、広く門を開いて、一般信徒が「あかし文章」を学び、書き、広める働きを進めて、現在に至っています。

★現在は2つのブロックで活動しています。★関東ブロック (関東以北の地域) ★関西ブロック (大阪周辺と西の地域) です。活動内容は各ブロックが自主的に進めています。それぞれに作品集を出版しています。この5月に関東が『百花繚乱 21人の自分史』を発行しました。(1800円+税) ご希望の方は事務局までご連絡ください

★Web上にホームページを開いています。(URL <http://jcp.daa.jp/>)

◎「あかし文章」に関心のある方はこの誌のトップ頁、またはHPのアドレスにご連絡ください。関東、関西は隔月に例会を開いています。案内はHPに掲載します。なお本誌「文は信なり」は関東ブロックが年2回ほど発行しています。HPにも掲載します。(誌代100円)